

高等学校国語「言語文化」学習指導案

令和4年〇月〇日〇限
埼玉県立川越初雁高等学校
第2学年〇組〇名
授業者 井上 智香

1 科目 言語文化

2 単元名 連句に親しむ

3 単元設定の意図

(1) 学級・生徒観

学習態度は真摯である。学級全体に対する発問に対しては、主体的に発言する生徒は少ないが、小グループになると積極的な意見交換が見られる。

(2) 教材観

連句は、近世になって発達した文化である。現代において「サラリーマン川柳」などが親しまれているが、これらは連句の系譜を継いで発達したものである。本教材で韻文の文化を知ること、より古典に親しむことが期待できる。また、連句を創作することで日本語の多様さ、20字に満たない言葉が生み出す世界の面白さを実感することが期待できる。

(3) 本単元で工夫する点や手立て

連句は、俳句に比べて季語などのルールによる制限が少ないため、生徒も簡単に取り組むことができる。授業の際は、式目を絞ることでより取り組みやすいようにする。また、ワークシートを用いることで、生徒の理解の助けとする。

4 単元の目標

- (1) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。 (知識・技能)
- (2) 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫することができる。 (思考力・判断力・表現力等) A(1)イ
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。 (学びに向かう力・人間性等)

5 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫している。	文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにしている。

6 単元の指導と評価の計画 (全2時間扱い)

時	主な学習活動・内容	評価規準と評価方法
1	<p>○身近な韻文について確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・五七五の長句と七七の短句を交互に詠み継ぐ連歌があること、そこから派生した「連句」の存在を知る。 <p>○「連句」について知識を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の連句を見せ、どのように前の句とつながっているのか実感する。 ・連句のルールを知る。 	<p>【評価規準】</p> <p>文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにしている。 (主体的に学習に取り組む態度)</p> <p>【評価方法】</p> <p>ワークシートの記述の分析を行う。 机間指導により、活動の様子を観察、また作品の確認を行う。</p>
2 本時	<p>○連句のルールをふまえ、グループごとに作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人目は、提示された写真から五七五の句を作り、二人目に渡す。 <p>○班ごとに発表し、鑑賞する。</p>	<p>【評価規準】</p> <p>自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫している。 (思考・判断・表現)</p> <p>【評価方法】</p> <p>回収したワークシートの記述の分析を行う 机間指導により、活動の様子を観察、また作品の確認を行う。</p>

7 本時の指導と評価の計画（2／2時間目）

（1）本時の目標

- （1）我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。 （知識・技能）
- （2）自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫することができる。 （思考力・判断力・表現力等） A(1)イ
- （3）文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすることができる。 （学びに向かう力・人間性等）

（2）本時の展開

段階時間 (分)	主な学習活動	○指導上の留意点 【評価の実際】
導入 (5)	前時の復習と、本時の内容・目標の確認をする。 【以下、グループワーク】	○今までの学習から「歌」が持つ影響や意味を整理して話す。
展開 (20)	連句を作成する。	○ワークシートを用意して、実際に連句を作成する。 ○一句目を作成するガイドとして、写真を用意する。 【評価規準】 表現を工夫する上で、ことばを調べながら自身の語彙を豊かにできている。（知識・技能） 前後三句で同じ場面を詠んだ句になっていない。 （思考・判断・表現） 学んだことを積極的に生かし、他と交流しながら、自分の作品を作っている。 （主体的に学習に取り組む態度）
(15)	創作した連句の鑑賞をする。	【評価方法】 机間指導により、活動の様子を観察、また作品の確認を行う。 ○グループごとに口頭で発表し、鑑賞する。
(10)	本時の学習内容を整理する。 感想を記入する。	○発表される連句がどのように前句と繋がっているかの読みとりを行う。また、最低限のルールを踏まえているかを確認する。 ○日本語、日本文化ともに興味・関心を深め、今後の学習につなげられるよう配慮する。

連句

組番氏名

()

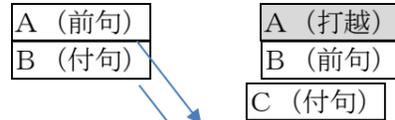
【1】連句とは

- ①最初の句から次の句を連想する。長句（五七五）と短句（七七）を互いに読み合うもの
- ②複数の人が集まって一つの作品を作り上げる → （ 座の文学 ）とよばれる
- ③和歌や連歌 → 伝統的な雅語（※和語のみ）を用いて表現する

俳諧連歌（連句）→ 日常生活を自由に表現する

俳句 → 俳諧連歌の発句が独立したもの

川柳 → 俳句とほぼ同じ。ただし、季語などのルールがない。



【2】形式

①続ける句の数によって形式が変わる

百句（百韻）／四十四句（世吉）／三十六句（歌仙）／十八句（ 半歌仙 ）

〈例〉 世吉 初折 表 八句 裏 十四句
 名残折 表 十四句 裏 八句
 歌仙 表 六句 裏 十二句
 表 十二句 裏 六句

【3】特別な句

- ①発句—最初の句。連歌会の開かれている季節の季語を使う。また、切れ字を使う。
- ②脇句—二番目の句。発句と同じ季節の季語を使う。句末は体言止め。
- ③第三—三番目の句。句末は「て」「らん」などで止める。
- ④季節の句—季語を含む句。春の季語を含む場合。春句という。
 春句・秋句—三句以上 五句以内 夏句・冬句—一句以上 三句以内 で続ける。
- ⑤雑句—季語を含まない句。
- ⑥定座—月の語（秋の季語）を入れる「月の定座」と花（春の季語：桜）を入れる「花の定座」がある。
- ⑦恋句—恋の言葉を使った句。
- ⑧（ 挙句 ）—最後の句。春の句で体言止め。

【4】ルール（= 式目 ）の例

- ①句をつけるときは、前句に関係付ける。
 打越の内容や雰囲気と同じになる（=三句がらみ）ことは避ける。
- ②同類語は三句隔てる

◎連句を作ろう

初折裏											初折表								
折端	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	折立	折端	五	四	第三	脇	発句		
春	花春	雑	雑	冬	月冬	雑	←雑	恋雑	→雑	雑	秋	秋	月秋	雑	雑	夏	夏		
																			句
																			作者

【5】まとめ

〈感想〉